



## タラントンのたとえ

著者	古村 聖
雑誌名	エコノフォーラム
号	29
ページ	81-81
発行年	2023-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10236/00030634">http://hdl.handle.net/10236/00030634</a>

人間を考える

2022年11月24日

# タラントンのたとえ

古村 聖 准教授

(労働経済学、家族の経済学)

2000年代以降における労働経済学の最も大きな貢献の1つは、労働市場の結果を左右する本人の性質のうち非認知能力の役割を考へ、既存の理論・実証モデルを再構築してきたことです。学力で測ることのできる認知能力に対し、非認知能力とは、性格、自己統制能力、社会的スキルなど数値化されにくい本人の性質のことを指します。

今日は非認知能力のうちの自己効力感について、心理学でわかっていることを中心に話していきます。自己効力感とは、Albert Banduraが1977年に提唱した心理学の概念で、成果を生み出すために必要な力が自分には備わっていると信じる力を指します。心理学では自己効力感が行動の動機づけの中心であることが指摘されています。また自分の力に対して肯定的な評価をしている場合に、生活や労働市場のさまざまなアウトカムにより影響を持つ傾向が報告されています。

さて、自己効力感が高ければいいことづくしですが、1タラントンを預かった人間からしたら、自分に何かできると信じることは難しいようにも思います。3人で比較した時には、むしろ1タラントンを預かった

人間ほど、行動に移すのが難しいような気がします。

心理学ではこうした自己効力感が低い状況を打破する一つの有効な方法として、小さな目標を設定し実際に実行していくこと、挑戦を続けること、が挙げられています。人は、成功と失敗の歴史を通じて、自分の能力についての信念を更新するとされています。逆に失敗を恐れて挑戦しなかったりしてしまうと、不必要にプレッシャーがかかり失敗しやすくなったり、逃げ癖がついたりしてとりかえしがつかないことになりま

す。

このように、本人の性質である非認知能力の自己効力感とは、才能の一つであるものの、生まれ持った固定的なものではなく、投資によって伸ばすことができます。しかし同時に、自分を信じるという才能は、富めるものは富み、持たざる者はさらに失うという構造が本当に起こるのです。結果としてそれが経済力で現れるのであれば、まさに経済格差は目に見える学歴などで起こるのではなく、本人の心持ちによっても変わってしまう、ということになります。

最近、この心の連鎖が労働経済学の分析に応用されはじめています。

たとえば女性は平均的にリスクをとらず、競争に身を置かないことがよく知られています。その原因として、女性は挑戦する機会が与えられていないために心の負の連鎖に陥っているのではないかと、自己効力感を高めるきっかけを与える政策が女性の労働参加や管理職への挑戦を促すかということが検証され始めています。人の生き方は自由ですが、いざというときに困らないように、また人生より豊かに成長して生きたい、今の状況を変えたいと考える人は、この心の連鎖の構造を頭に入れておく必要があります。

そして、忘れられがちですが、今自分にあるものに目を向けるということも大事です。みなさんは今何タラントンを持っているでしょうか。それは恒常的なものではありません。ぜひ、持っているものに感謝して、それを活用するということを意識しながら学生生活の限られた時間を送ってもらえれば嬉しいと思います。